［公開講座　特別講演1］

江戸の流行り病と人々のくらし
――幕末の疱瘡と種痘導入をめぐって――

鈴木　則子
奈良女子大学生活環境学部

一，「おやく」としての疱瘡

江戸時代，疱瘡は麻疹・水痘とともに，一生のうちに一度経験せざるを得ない，いわば逃れようのない病として「お役」「お厄」とも呼ばれた．疱瘡見舞に使われた病児向け絵本『疱瘡安躰さゝ湯の壽』（江戸後期）には，「こどものおやくで，ぜひほうそうはいたすがさいはひ」とある．疱瘡が非常にうつりやすいため逃れにくい感染症であったこと，一度かかれば終生免疫が形成されて再感しないことからこのように言われたと考えられる．

もっとも，「いたすがさいはひ」という言葉とはうらはらに，感染すれば致死率は2～3割にものぼり，重篤な後遺症が残ることも少なくなかった．しかも，江戸時代後期には人や物の行き来が盛んになるにつれて，疱瘡の流行頻度が高まった．都会では年中どこかで流行り，地方でも数年おきには流行するという，頻度の点からいえばありふれた病となる．そのために人々は疱瘡をさほど恐れなくなっていた，と記す医書もある（『疱瘡問答　附種痘説』）．

疱瘡のような致死率の高い小児感染症が頻繁に流行り，それに慣れてしまうという感覚は，現代人にとってにわかには理解しがたい．これはいわば感染症との「共生」といってよい状況だが，致死率の高い感染症との「共生」とはどのような生活だったのだろう．避けられない疱瘡との「共生」という事態を人々はいかに生き抜いたのか．さらに，幕末には疱瘡の救世主である種痘が登場する．効果や安全性に対する信頼がいまだ未確立だった種痘を，人々はどう受け止めたのだろう．

これらの問題を，地方に残された日記史料をもとに考えてみたい．従来の疱瘡の歴史は，治療する側の医師が書き残した医学関係史料を中心にして叙述されることが多かった．そこから明らかになるのは「医学の歴史」であり，病と闘う医者の姿と，治療される存在としての患者の姿である．だがここでは視点を変えて，疱瘡流行に直面した家族の目から見た病の経験と種痘を受け入れていくプロセスを描いていく．

日記は二種，いずれも種痘が積極的に推奨された韮山代官所支配地の宿場町住人の手になる．一冊は『袖日記』と名付けられた駿河国富士郡大宮町 の造り酒屋主人横関弥兵衛のもの，もう一冊は『金（かねよし）璙生涯略記』という，駿河国庵原郡蒲原宿で材木商などを営んだ渡邊金璙によるものである．富士郡と庵原郡は富士川を挟んで接しており，大宮町と蒲原宿の疱瘡流行はこれから見ていくように連動している．したがって，両史料をあわせみることで，さらに詳細な幕末の疱瘡経験の実際を検討することが可能となる．

二，大宮町横関家の場合

1，長男松太郎の疱瘡

現存する『袖日記』は天保14年（1843）から文久3年（1863）迄で（一部欠損），記録されている疱瘡の流行は計6回である．

長男の松太郎が疱瘡にかかったのは，弥兵衛が30才，松太郎が3歳になる嘉永2年（1849）の春のこ

とであった．駿河国富士郡周辺では，嘉永元年冬から翌嘉永2年5月まで，疱瘡が近郷を移動しながら流行した．この年は通常の流行周期より間隔があいた7年ぶりの流行で，若い父親弥兵衛は緊張していた．大宮町に流行が侵入する直前の嘉永2年正月から，近所の道祖神や疱瘡の御利益で知られた神社で，「疱瘡を軽くする」ための祈願をしている．「疱瘡除け」祈願ではない点が，当時の人々の疱瘡への覚悟をうかがわせる．

松太郎が発症したのは3月に入ってからだった．早速かかりつけの医師と鍼灸医である座頭を呼ぶ．松太郎の疱瘡は医者の見立通り重症だった．数日後には全身に痘が広がり，弥兵衛は疱瘡棚を吊って疱瘡神を祭る．疱瘡棚を吊るのは疱瘡罹患を公表することであり，近所や親せきから疱瘡見舞が届き始める．発症から15日目に疱瘡が治った祝いの「湯かけ」の式と祝宴を催した．ただし，松太郎はいまだカサブタで目や口がふさがっていて，かゆがっていた．家族はカサブタをかき壊してあばたが残らないよう，このところ徹夜で連日見張っている．ところが「湯かけ」の翌日，家族が目を離したすきに松太郎は鼻先のカサブタを自分で落としてしまった．弥兵衛の親としての悔しさが日記から伝わってくる．松太郎は疱瘡が治った後も体調不良が続き，結局全快までに2か月を要した．完全に疱瘡流行が終息して町の疱瘡神送りが実施された時には，すでに5月の末になっていた．

2，弟妹達の「入疱瘡」

翌年の嘉永3年以降，弥兵衛にはさらに5人の子どもが生まれた．一人は夭折するが，他の四人は全員が「入疱瘡」＝牛痘接種を受けることになる．牛痘接種が日本に登場するのは牛痘が長崎に輸入された嘉永2年7月からで，松太郎が疱瘡を経験した直後のことであった．

韮山代官江川太郎左衛門英龍は，嘉永3年2月21日付で「西洋種痘法の告諭」をその支配地に触れる．英龍の娘と息子に江戸の蘭方医伊東玄朴が牛痘接種を行ってうまくいき，さらに江戸屋敷の家臣の子や領内の子どもにも接種して安全性を確認したので，全所領を対象に侍医肥田春安が希望者へ接種を行う，という内容の触であった．英龍の支配地は武蔵・相模・伊豆・駿河・甲斐の各地に分散していたが，事前に全支配地の要所要所の子ども一名ずつに接種して，支配地全域で種痘効果を示してみせるという念の入れようであった．

嘉永3年生まれの弥兵衛の長女お花は，生後8か月の嘉永4年2月に大宮町の町医者中西秀才から種痘を受ける．弥兵衛の日記に町内の種痘記事はお花以前には登場せず，早い事例だったと思われる．その後は安政3年（1856）に次女お徳が，文久2年（1862）には三女およしと三男熊吉が種痘を受ける．特に注目されるのはおよしと熊吉の種痘で，生後9か月のおよしの痘を，1歳4か月の熊吉に植え継いでいる．弥兵衛はお花やお徳の種痘の時には省略した疱瘡儀礼を丁寧に行っていて，親としての緊張感が伝わってくる．この時は種痘医中西に一人当たり金百疋，二人合わせて二百疋の謝礼を贈った．大宮町の種痘は経済的に豊かな家庭でなければ実行できなかったことがうかがえる．

三，蒲原宿渡邊家の場合

1，孫泰次郎とおいよの疱瘡

もう一軒の蒲原宿の日記史料『金瑭生涯略記』に目を移そう．この日記を書いた渡辺金瑭は天明5年（1785）生まれで，彼の日記では嘉永2年（1849）における孫二人の疱瘡経験と，嘉永5年の集団接種に関する記事を確認できる．

弥兵衛の長男松太郎が嘉永2年3月に疱瘡を経験したが，蒲原宿でも同じころ疱瘡が流行していた．金瑭の数えで5歳の嫡孫泰次郎の疱瘡は，嘉永2年閏4月16日に定石通り発熱から始まる．渡邊家では3人の医者を呼んで合議により治療にあたらせた．泰次郎の疱瘡も松太郎同様に重症であった．高価な薬を様々に用いるが病状は改善せず，同28日，泰次郎は乳母の名を呼びながら死去した．金瑭は「悲

い哉，歎ない哉，断腸譬るに物なし」と綴る．

泰次郎の葬儀の翌日，妹のおいよも疱瘡を発症する．今回は医者を変え，「疱瘡医師」と呼ばれた内野雄淳が泊まり込みで診療することになる．内野は「西洋医」で疱瘡治療を得意とした．相州出身で近年東海道由比宿西隣りの北田村へ移住してきた．同村の酒屋八郎兵衛が内野を信頼して出資し，去年から村内の子供達全員に種痘を受けさせた結果，みな軽症で済んで死者は二人だけだったという．

牛痘接種が日本で行われるようになったのは嘉永 2 年 7 月からであるから，内野が行っていたのは牛痘ではなく，人の疱瘡を人に植える人痘接種であったはずだ．人痘接種は場合によっては周囲に疱瘡を感染させることもあり，また重症の疱瘡を発症する危険性もあったので，牛痘接種が導入されてからは行われなくなっていった．内野がどこで人痘接種の技術を身に着けたかは不明だが，弱毒化させた人痘を巧みに接種する技術を持っていたようである．もっとも種痘によって感染させた結果，全村の子どものうち二人死亡という数値を多いとみなすか否かで，内野の種痘への評価は分かれるところではあるが．

おいよの疱瘡も重症だった．だが内野は，一番簡単なのは種痘により軽痘を発症させて治療することだが，このように初発から任せてもらえば必ず全快させると請け合った．彼の治療は，按腹を行うとともに下剤や浣腸を使って痘毒の排出を目指すものであった．いやがるおいよを抱きかかえて樋を使って無理やり服薬させ，ついにはおいよは樋を見ただけで震え上がるようになったという厳しい治療態度だった．実は金瑞は彼の治療が激しいという評判を聞いていたので泰次郎の時には呼ばなかった．だが泰次郎で失敗したので「今は一人に手を焼きし故，投出して招きたり」という覚悟で招いたのである．

内野は人参やキニーネという高価な薬も併用しながら九日間泊りがけで治療し，さらに往診を重ねておいよを全快させた．

2，集団接種の実行

泰次郎とおいよが疱瘡にかかった翌年の嘉永 3 年 2 月に，先に見たように韮山代官所はその支配地に牛痘接種の告諭を触れている．金瑞は嘉永 5 年 1 月 8 日，小島（おじま）藩藩医澤井素庵を末の孫娘おきみへの種痘に招いた．金瑞は前掲の北田村八郎兵衛が行った人痘無料接種に倣ったのだろう，きみの他に希望する家の子ども 15 名にも無料で接種させた．

おきみの種痘は順調に経過し，金瑞は痘が出た段階で疱瘡棚を吊る．15 日，澤井の弟子が種痘の結果を確認するために来宿する．種痘人 16 人中「移らさる者」4 人，「自然痘」になる者 2 人，「但し一人も間違いなし」と金瑞は記録した．すなわち種痘を受けた 16 人中，善感 10 名，不善感 4 名，「自然痘」つまり流行中の疱瘡にかかってしまった者 2 名，死者なし，という結果である．疱瘡流行中の接種だったために，免疫が形成される以前に「自然痘」に感染することも十分あり得た．死者は一人も出なかったことが特筆されているのは，種痘の安全性に対する金瑞の緊張感の現れだろう．

金瑞はこの集団接種の記事に続けて，蒲原宿内で彼と激しく対立していた酒屋久七と牧屋久八の子どもらの種痘について言及する．金瑞に言わせれば両名は彼の種痘実施に張り合って，富士郡大宮町から医師中西を招いて種痘させた．ところが久七の子は善感したが，久八の子は重症の「自然痘」となって亡くなった「（「此間中，酒屋久七・牧屋久八申合，我へ張合種痘之医師中西氏を大宮町より迎へ種痘せしに，久七方は吉，牧屋久八方は自然痘出て極難痘にて終に没したり」）．「我へ張合」種痘を行った，とあるからには，おそらく久七・久八が合同出資して宿内の子どもたちに無料で集団接種を実施したのだろう．呼ばれたのは大宮町の医師中西，すなわち弥兵衛の子どもたちに種痘を施したあの中西であった．

なお，澤井が施術した集団接種の成績は死者こそ出なかったが，施主の金瑞の満足感に反して，16 人中善感 10 人で善感率 62，5 パーセントというのはかんばしくない．これだけ不善感が多いのは，現代人がイメージする疱瘡の予防接種とは相当異なる．

おわりに～種痘を巡って

横関家と渡辺家の疱瘡をめぐる経験をみると，いずれも惣領息子の疱瘡で苦労して，韮山代官所の牛痘接種奨励ののち，比較的早い時期に牛痘接種をその弟妹たちに受けさせている．種痘代が高額であったことから，個別には両家のような経済的に恵まれた人々に可能な選択肢であった．

種痘は経済的な問題さえなければ，弥兵衛や金瑞のような一定の知識水準にある人々以外からも歓迎された．それは蒲原宿の子供たちの親が，渡辺家が行った集団接種を我が子に積極的に受けさせたことからもうかがえる．疱瘡の流行頻度やうつりやすさゆえに，人々は様々な疱瘡儀礼を生み出してこの病と「共生」する努力を重ねてきた．だが個人の疱瘡経験は往々にして緊張や悲痛に満ちたものであり，種痘への希求は当然の流れであった．

ただし，人痘接種にしても牛痘接種にしても，予防法ではなく疱瘡の治療法の一つと位置付けられていた．すなわち，元気な時に人為的に軽い疱瘡にかからせて“治療する”という認識である．旧来の疱瘡治療の枠組みのなかで理解されることで，種痘は人々に受け入れられた．牛痘接種後に従来通り疱瘡神を祭ったのも，種痘によって軽症とはいえ疱瘡に罹患したのだから，疱瘡神は家を訪れる，という認識による．

また，名望家層が出資して集団接種を行った背景の一つに，疱瘡が共同体として経験する病であったことを指摘したい．疱瘡は疱瘡見舞から湯かけの祝宴，集落から流行が去ったときの疱瘡神送りに至るまで，共同体が関与して乗り越える病であった．そのために種痘も，名望家層による一種の施行という形になじみやすかったのである．

種痘はこうして，幕末の病気観や習慣と融合しながら人々の生活の中に入り込んでいった．ただ人痘接種・牛痘接種のいずれも，江戸時代の種痘は技術の不確かさによって，北田村の二人の犠牲者や牧屋久八の子のような犠牲者をいまだ伴うものだった．

ところが日記史料から医学史料に目を転じると，人々が経験している種痘の現実と医学史料が発信する情報との間には，ずれがあることが理解される．人痘接種普及を目的に出版された『種痘活人全弁』は，人痘接種をすれば再感しないこと「百発百中」と断言し，また人痘を植えることで通常の疱瘡同様に全身に症状が出て死亡するという事態の可能性を強く否定している．

それが嘉永2年，牛痘接種が行われるようになると，牛痘接種の普及活動の中で人痘接種のリスクや不善感の多発が強調されるようになる．牛痘接種普及を目的とする『皰瘡問答　附種痘説』には，天然痘・人痘接種・牛痘接種のイギリスにおける比較データが載る．それによると，人痘接種は種痘を受けた者から周囲の人に感染させたり，重症化することがあるだけでなく，死者が接種された者300人中1人（ロンドンでは100人に1人）の割合でいた．また，死に至らずとも危険な症状を呈するのは30人から40人に1人いて，種痘後に痘が多く出て顔面にあばたを残すこともあるという．対して牛痘接種は「種るときは必す善良・安静，決して危険なく人痘を予防すること疑なし」と記す．

万全のはずの牛痘接種もまた，明治初年になると一度の牛痘接種では善感しにくいことが多いとわかり，二回接種が奨励される．一回接種で疱瘡流行の際に罹患する患者が続出したのである．これら医学史料の記述が示すのは，種痘の医学が人々に拡散しようとした情報は変わりやすく，また種痘普及に利するために，その信ぴょう性も時に危うい面があったということである．

最終的に種痘は，善感率が高く，かつ副反応の出現率を抑えたワクチンへと改良を重ねるなかで世界に普及し，1980年，WHOが疱瘡の世界根絶宣言を行った．疱瘡は過去人類が撲滅に成功した唯一の感染症となったわけだが，ジェンナーによる牛痘発見から撲滅迄，実に200年かかっている．こうして疱瘡の歴史をたどっていくと，日本人の生活史が現代にいたるまで，感染症とともに紡がれてきたものであることに，あらためて思い至るのである．